今日に處するの道如何

帝大助教授
文學博士　深作安文

私は別に諸君に向ひまして教訓がましいことを申上げる考は毛頭ございませぬ。唯眼前の日本を見て多少考へました所を申上げまして諸君の御意見を承りたいと思ひます。何事にも意見の隔意なき交換といふことは結構なことゝ存じますが、特に眼前の日本に付きましては斯樣な御集りに於て腹藏なき意見の交換といふことは餘程必要であるといふ風に思ひまして、聊か自分の考へを申上げたいのでございます。私に取りまして今日に處する道は問題でありますから、「今日に處するの道如何」といふ題を定めた次第でございます。

今日の社會の全部と申す程ではないと思ふのでありますが、或側面を見ますといふと、どうも樂觀を容さぬものゝやうに思ふのであります。御話の順序として三四箇條のことを申上げて見ますといふと、今日の我同胞の一部分には自己主張と申しませうか、敢て臆面なく自己を主張する傾向が隨分甚だしいのでございます。既に己れを固執しますから、家なり國なりの自分に加へる正當な制限をも中々容さ

す、唯思ふ儘に自己を主張するやうに見受ける次第でございます。隨つて此態度からは何事も自分本位でありまして、少しも自らを內省しまして、己が態度の可否を吟味する餘裕がないのでございます。その結果無規律、無作法、思ふ儘に振舞ふのであります。又目に餘るまでに見ゆることは同胞の一部の心が何分緩んで來て居るとであります。いひ換へますと、如何にも緊張味を缺いて居る、だらりとして居る、弛緩して居る、斯ういふ風が見ゆるのであります。何事も目の前だけ無事に濟めばそれで宜しいのである、姑息とか、短見とか申しませうか、ただ一時を糊塗すればそれで宜しいのであつて、眞理に歸着して然る後已むといふやうな凛々しい態度がどうも此の方面の同胞に少いのであります。或は事勿れ主義と申しますか、唯其の日〳〵が無事に濟めばそれで宜しいのであります。此の箇條の下に申しても宜しいと思はれることは、一部の同胞の性的規律が如何にも乱れて居ることであります。少し强い言葉で申しますならば、近頃は性的犯罪者が頻りに現はれて來るのであります。特に殘念なのは教育界に此種の犯罪者が隨分多くなつて來たことであります。教育界に於ける性的犯罪者の激增といふことは極めて醜いことゝ思ふのであります。

次には腕力の跋扈とでも申しませうか、冷かに道理に訴へまして裁くべきことをば直に腕力に訴へるやうになつたことであります。この事實は必ずしも日本ばかりでないのでありまして、隨分歐羅巴にも

亞米利加にも見える事實ではございますが、兎も角現代日本には腕力跋扈、力の横暴といふ事實が見えるのであります。小石川區某私立大學の創立者の六回忌の嚴かな式場で、四人の壯漢が一人の武裝なき老教授を毆打したことの如き事實は、地下の同創立者の靈は果してこれを何と見られるか、其の被害者はつい此の間私に呉れました書面の端に、「片手の人」と書いてありまして私は限りなき感慨に打たれました。

次には今日の我が社會には、人心の惡化とでも申す言葉で現はしますことが隨分澤山あると思ひます。如上の腕力の跋扈も亦人心惡化の結果に相違ないのでありますが、單に腕力に訴ふるに止りませぬで、相手の生命を奪ふことが餘程夥だしいのであります。一人が一人を亡き者にするのならば未だしも一人で三人、四人を、甚しきは則ち八人を亡き者にした者があるのである。又他人を亡きものにするのみでなくて、己が父母と妹とを亡き者にした者が某高等學校の學生の中から現はれたのであります。更に甚だしきは我が大御國の礎をも覆へさうといふ恐るべき犯行が爲されたといふことは、御同樣洵に歎かはしい次第であります。人心の惡化も是に至りて極まりといふべきであります。

斯樣に考へて來ますといふと、現代社會の暗黑面を形造る箇條は他にも澤山あると思ひますが、先づこのあたりに止めまして、進んで斯ういふ社會相の起源に就いて申して見ませう。是は餘程複雜な理由

があると思はれるのでありまして、決して簡單な事情ではない。隨つて之を說きますにも一箇條若くは二箇條の理由で形付けてしまふことは出來ぬのであります。僅に一箇の事實でも細密に之を調査しますならば相當複雜な原因の綜合して出來て居ることを知る事があります。けれども之が理由中の理由ともいふべきものを提げて見ますといふと、私は如上の諸事實は我同胞の一部が個人主義的に目を覺まして來た爲めであると思ふのであります。即ち個人主義的覺醒が其の原因中の原因ではあるまいかと思はれます。已に覺醒でありますからその全き意味に於きましては如上の事實などの起るべき理由はないのであります。例へばその覺醒が昔、釋尊の到達せられた自覺といふやうなものであるならば、如上の事實の起るべき道理はない筈でありますが、其の覺醒が如何にも怪しい覺醒である、誤つた覺醒である。或は覺醒といふ言葉を使ふのが無理かも知れませぬ、若し覺醒ならば誤つて居る道理がないといふならば覺醒といふ言葉は使はぬ方が宜いかも知れませぬ。兎に角、如上の事實の原因は一部の同胞が個人主義的に目を覺ました結果であると思ふのであります。

其處へ一つ助成原因と申しませうか、第二次的原因と申しませうか、これが加はつて居るやうに思ひます。それは同胞の一部が如何にも感傷的になつて居ることである、センチメンタルになつて居ることである。是が私は助成原因として餘程力强きものでありはせぬかと思ふのであります。遺憾にも冷靜な

理知の判斷から遠のいて感情に驅られるのであります。これを要するに第一義的原因の一つは同胞の個人主義的覺醒であつて、之を助けるに感傷主義を以てしたならば上陳の現社會の暗黑面が生じ來るのではないのでせうか、このあたりが諸君の御意見を承りたい一点であるのであります。

吾々は指導階級に屬して居る者として、之を傍觀して居る譯に行かないと思ふのであります。無論此の事は日本社會に動いて居る大きい勢ひでありますれば、迚も一人や二人がどんな努力を以てしても全然これを阻止するといふことは出來ぬと思ひます。さればとて全然無爲にして社會の暗黑面をして益々昂じさせるといふことはどういふものであらうか。どうにかして出來る丈け之を救ふ方法を講じたいと思ひます。そこで自づと今日に處する道を研究する必要を生じて來る次第であります。

先づ個人主義といふものから考へて見たいと思ひます。人に依りますと此の個人主義を台無しに貶してしまひます。彼は個人主義者であるから、彼の行ひは個人主義的であるから、といふ風ないひ方は能く我々の耳にする所であります。けれども少し餘裕を以て個人主義を味はつて見ますと、さう頭から貶してしまふのも如何と思ふのであります。世間の一部の人が貶しまする個人主義は、その中心觀念たる個人を極小さなものに捉へまして、利己主義に墮しましたものでございます。利己主義の貶すべき理由は數々ございますが、其の主なるものは利己主義の社會觀の間違つて居る爲めであります。利己主義の

立場に立つて社會を解しますと、社會は唯衆個人の偶然の集りであり、機械的集團であります。ですから己れの欲求をば慕地に滿足させようとして他人の利害を顧みませぬ、けれども事實、活きた社會はそうではありませぬ、活きた社會は衆個人が內面的に結合して出來て居るのであります。ですからその構成要素たる個人の利己的行動は第一、社會の組織を緩めるのである。社會の利害を考へないで單に一私の自己をのみ利しようとすれば社會を組立てゝ居る人と人とを隔てゝしまふのであります。社會の組織を緩めますればその一員たる自己の爲めにもなりませぬ。就いては利己主義は一擧して二つの不都合な結果を生ずるのであります。斯ういふ意味の個人主義は無論排斥して宜しいのである、然り當然排斥せねばならないのであります。特に今日のやうに各人の社會觀念がます〳〵明かになつて參りましては、社會といふものを正しく捉へませぬければ、公的にも私的にも種々の差支を生じて來るのであります。

けれども此個人といふものを別に取扱ひますといふと、個人主義は他のより善き主義に轉回し來るのであります。それは個人の純化であります、純化とは純化さるゝものゝ特殊性を棄てましてそれの普汎性を抽出す手續をいふのであります。万人に通ずる本性に立ち還ることであります。そうすると我々は到頭個人の本質に觸れるのであります。個人の本質とは人格であります。されば個人を純化しますと個人主義は轉回して人格主義となるのであります。此の人格主義は捨てるどころではない、我々は之に徹底

しまして、之に依つて今日に處しましたならば或は大いなる過がないではないかと考へられるのであります。

そこで進んで人格主義を取扱つて見たいと思ひます。どなたも御承知の通り是まで人格は二通りに解されて居ります。其一は心に統一の存する姿である。詰り思想も、感情も、欲求も、聯絡を保ち、關係を有して働く場合である。思想、感情、欲求が無聯絡無關係で無しに皆聯絡を有つて働くといふのが人格の一つの意味であります。筋の通つた思想を構へ、秩序の立つた行爲に出て、價値のある欲求を充足させるのが人格の一つの意味であります。是は普通、心理學の方から說かれる人格の意味であります。

次には人格を價値判斷の主体と見る說き方であります。大きい人格、小さい人格、高い人格、低い人格といふ風に大小高下といふ評價をせられる主体といふ意味であります。之は學術の方から申しますれば倫理學の下す人格の解釋であります。此等の二つの人格の解釋は何れも科學的のものでございまして無論間違つて居るといふべき筈のものではありませぬ。

けれども如上の解釋を考へて見まするといふと、此等は何れも人格を靜的に見て下した解釋であると思はれるのであります。蓋し事實としての人格はもつと活動して居ります。ところが心理學的に說かれたものも、亦倫理學的に說かれたものも人格を以て一時靜止して居るものと見て解釋したものといい

ふ風に思はれるのであります。今日は哲學の側でも、亦自然科學の側でも總てその研究事項を其儘で取扱ふやうになつてゐます、それの實際動いて居る儘を研究する、流動の姿に於ける研究對象を研究するといふ風になつて居ります。事物の動的考察が眼前の學術界の大勢であります。若し此の大勢に從つて人格といふものを研究して見るといふと、どうも唯今申した二つの解釋では物足らぬやうに思ふのであります。更に動的に人格を捉へて見たい考が起るのであります。それで私は人格に就いて是から申し上げますやうな考へを有つて居る者であります。

如實の人格は餘程活動して居るのであります。從つて人格は唯、心の統一の姿とか大小高下の價値付けの對象とかいふのでは足らぬのであつて、餘程有力な活動の主体たるものであります。吾々の人格は吾々の思想を創作致します、即ち己が感覺なり、知覺なり、種々の經驗を材料としまして其の事柄に關する思想を創作するのであります。簡單にいへば己が認識しました事柄を材料と致しまして、それに關する思想を創作することが人格の一つの働きであります。然るところ、一度創作されました思想はじつとして頭腦の中に止まつて居ることを嫌ふのであります。思想はその本性の一として外部へ出たがるものであります。自己表現と申しませうか、自らを外部に表現しようといふのが思想本來の性質のやうに私は思ふのであります。彼の兼行法師が徒然草の中に「思ふといはねば腹ふくる」というて居りますが、

丁度思想の自己表現の根本的傾向を能く言ひ表はして居るやうに思ふのであります。既に頭腦の中に形造られた思想は單に思想としてそこに長く留つて居ることを嫌つて、どうにかして外へ出たがります。又出しますと思想の持主には愉快な氣持を持たせるのであります。爲めに機會がございますといふと頭腦內の思想は外に自分を表現しまして、一廉の行爲となるのであります。この意味で人格は行爲を創作するといふことが出來る、即ち人格は第一段に思想を創作し、第二段に行爲を創作するのであります。如實の人格は人の思想と行爲との創作の主体であります。

爰で創作といふ言葉の意味を一通り申上げて見たい。元來創作といふ言葉は藝術の方の言葉でありますとはどなたにも御承知の通りのことでございます。例へば小說家が小說を創作する、彫刻家が彫刻の創作をするといふやうに使ふのであります。是まで之を人格の働きに適用しました例は餘り私は知らぬのでありますが、私は之を試みて居る者であります。然らば小說の創作、彫刻の創作といふことはどういふ意味の言葉であるか、といひますと、小說家は己が頭腦の中に湧き出しました思想をば其の麗しい筆で叙述するのである、これが小說の創作といふことである。又彫刻家はその頭腦內に宿つた想を鋭利な鑿を以て木なり石なり金屬なりを材料にして具象化するのである、これが彫刻の方の創作といふ意味でございます。若し別な言葉を以て申せば、一定の可能性をば己れが一廉の力を以て之を現實性に持來すとい

ふとであります。私は此の事を人格が致して居ると思ふのであります。人格が思想を創作いたし、また行爲を創作するのも亦之れに等しいのであります。即ち思想の可能性を現實性となし、行爲の可能性を現實性とするのである。此の意味では何人も一種の小説家であり、一種の彫刻家であるのであります。さて生命のあるものは凡て此の働きを持つて居るのですな、即ち己が或力に依て可能性を現實性たらしめるとは、生きとし生けるものの本來の傾向であります。然らば個人の本体でありまする人格に此の事のあるのは極めて自然的のことであると思はれます。先頃私は或人から斯ういふ話を聞きまして大層面白く感じました。それは滿洲の撫順炭鑛での一の出來事であります。一人の坑夫は同炭鑛の岩層の中から一粒の團栗を見出したのであります。これはこれまで何百年經ちましたか、或は何千年經ちましたか、兎に角、石炭の出來る年月を經過したのであります。そこでそれを土に蒔いて見た所が芽を生じたのであります。今後それを能く世話しますならば、天を摩する喬木となるのでありませう。即ちこの一粒の團栗には可能性を現實性にする傾向の存することは疑はれないのであります。吾々人間は生命のあるものゝ中で最も高等なるものでありますから、其の人間の本体でありまする人格に此の意味の創作性の存するのは極めて當然であると思ひます。この故に野蠻人は措いて問はず、苟も文化人たるものは思想と行爲と此の二つのものから出來て居るのでありますれば、人格は文化人の自我を創作するも

のであるといふことが出來る次節であります。

人格の創作といふ意味を一層明かにする爲めに私はこれを機械の品物を製造することと比較して見ようと思ふのであります。例へば煙草を刻む機械を見るに、それは外から動力を加へまして始めて動くのであります。人の力なり蒸氣の力なり、兎に角外から動力を加へまして、始めてその機械が動いて煙草を刻むのであります。次に其の刻まれた煙草は常にその寸法が等しいのである、今日刻まれたものも、昨日刻まれたものもその寸法は等しいのであります。それが異つてゐては困ります。次に其の機械が煙草を刻みます時は自ら其の刻むといふ働きを意識して居りませぬ。即ち無意識的に刻むのであります。この三箇條のことが煙草を刻む機械に就いていふことが出來ます。繰返へせば外から動力を加へると、その製品は同樣なること、其の働きをば自ら意識せぬことであります。此の事を人格の創作に照し合せて見ますといふと、全くその趣を異にするのであります。人格が思想なり行爲なりを創作するにはその內側から創作しようとして創作するのであります。詰り內發的創作であつて外から動力を加へは致しませぬ。最も創作の機會は或ほ外部から與へられることがあるかも知りませぬけれども、思想を創作する段になれば己れの思想を己れが創作するのであつて何處までも自發的、內發的であります。他動的でなくして自動的であります。第二機械の製品は常に等しいのであります。若しそれが違つてはいけないのであります。

然るに人格の創作する思想なり行爲なりは一々違つて居ります。同じといふことは殆んどないのであります。今日の思想、今日の行爲、昨日の思想、昨日の行爲とは違つてゐる。これはその材料の源たる内的經驗並に外的經驗が違ふからであります。第三に人格が思想なり行爲なりを創作する時は自らそれを意識して居ります。機械が煙草を刻むとは異つて何處までも己れが己れの思想を創作し、己れの行爲を創作するといふことを意識して居ります。この故に人格の創作作用と機械製造作用とは全く其の趣を異にするといふことが明かであります。人間は決して機械ではありませぬ。何處までも内發的、自主的、意識的創作作用を營むところの人格の所有者でございます。

吾々は人格の所有者でございますから、毎日生きるに當つて唯機械が品物を造るやうに生きるのでは値打ある生き方ではありませぬ。新に何ものかを加へて行かねば生きがひがない、思想に於ても何ものかを加へ、行爲に於ても亦何ものかを加へねばいかぬ。それでなければ人格の所有者の生き方ではないのであります。吾々の生活といふものは毎日々々同じものを繰返して居るのでは足らない。プラス、エツキスで必ず新に何ものかを加へて行きたいのであります。言換へれば、吾々の人格的生活は新しい自我を創作して新しい値打を加へて行かねばならぬのであります。新自我を創作し、これに價値を加へて行くのが人格的生活であります。私は之を人の精神生活といふものゝ意味と致す考へであります。吾々

が精神生活を遂げるといふとは果してどういふとかといふに、毎日々々思想に行爲に新しいものを加へて行くとであります。詰り新生を打開して行くとであります。此の生活法は無論生命のない機械には無い、たとひ生命のあるものでも動物にはございませぬ。畢竟、人間特有の事實であります。而して又そうせねばなりませぬ、即ち新性の打開といふとは人間生活の事實であつて理想であります。ザインであると同時にゾルレンであります。隨分是まで學者や宗教家が人格の尊嚴といふとを說いて居りますが、私は人格の尊嚴の意味を日に日に新性を打開するところに求めやうと思ふのであります。

そこで私は人格主義をハツキリと限定する機會に到着したのであります。人格主義といふのは人格といふものを以て眞實にして社會に成立つて居るものとして、特に其の智識的、道德的並に宗教的活動を重く見る立場であります。我國にこの人格といふ言葉に近いものがあると思ふのであります。例へば日本の武士、武夫といふものは單に戰爭ばかりが上手な者ではないのであります。勿論戰爭に巧みなものも武士に違ひないのでありますが、典型的の武士を我が國の歷史に求めますと、唯戰爭に巧みだといふばかりでない。思想に於ても、行爲に於ても常人の有たぬものを有つて居ました。士に取つて大切なものは戰鬪的精神でありますが、單に敵を殺すのみが武士ではないのであります。敵を殺すと同時に敵を愛するとを知つて居りました。文武兩道と申して、武道の外に學問を重んじました。神を敬することを

知り、佛を崇めることを知りました。即ち彼は智識的に道德的に宗教的に己れの人格を練磨しまして、始めて典型的武士となることが出來たのであります。又孔子教や儒教では君子とか聖人賢人とかいふ言葉がございますが、是亦私の申す人格の意味に近い所があるやうに思ふのであります。君子にしましても聖人賢人にしましても、知識は勿論、道德や信仰の点で修養のあるものであります。中にも聖人となりますといふとズット偉いものでありまして、孔子自からもこれには居られなかつたのであります。賢に致しましても孔子は餘り、之を門人に許さなかつたやうであります。例へば顏回には、「賢なるかな回や」と申して之を許しました、顏回は陋巷に居つて飲食物の不足なのをも平氣でその樂みを改めなかつた人であります。ですから賢人や聖人になりますといふと、餘程知識の側、道德の側、又信仰の側に於て秀でたものを持つて居つたもののやうに思はれるのであります。英國では紳士といふものを重んじまして、特に教育上之を重視しますことはどなたも御承知の通りであります。これも矢張り思想的に亦實行的に卓越した人格内容を有つたものであります。中にも正義を愛するといふことは紳士にとつて欲くまじきことのやうであります。斯樣に考へますれば聖賢君子にしましても亦紳士にしましても、細かい所は相違がありませうけれども、人間の典型的個條を目當てにして進む所は一致して居る所で、私は之を人格主義の立場にあるものと思ふのであります。

唯今人格主義の定義の中で人格は社會的に成立つといふことを申しましたが、此の点に付いて一言したいのであります。個人主義が利己主義に墮しますといふと、此の社會を以てばら〳〵の個人の集まりと見てしまふのでありますが、人格主義は決してそうではありませぬ。人格主義は何所までも社會を衆個人の有機的集團であると考へるのであります。個人が知識の点で道德の点で信仰の点で其の内容を豐富にして、人格的價値を具へる爲めにはどうしても社會の中に生きてその孚むところとならねばならぬのであります。爰で申す社會は廣き意味のものでございまして、國家も無論其の一つであるのであります。國家は主權の存する社會で御座いまして、諸々の社會中最も發展したものであります。ギディングス教授は之を「完成的社會」と呼んで居ります。

さて唯今まで申しました人格が自覺と反省といふ二つの態度を取つて社會の中に生きれば、それが其ままで社會創作となるのであります。何故特に自覺と反省とをいふかといひますと、この二つの事柄が個人と社會とを結付けるものとなるからであります。自覺とは自分で眼を覺ます事であつて、反省とはそれが本當の覺醒であるかどうかといふ事を吟味することであります。反省とは詰り自己吟味といふ程の事でありまして、自分で自分を調べることであります。それで是まで申上げました人格の所有者が自覺と反省の二つの態度を以て社會の中に生きますといふと、その生活は其の儘で社會創作となるのであります

す。社會創作とはこれに屬する個人が社會の有する諸々の可能性に力を加へまして、それを現實性に持つて來るとでありまして自我創作の場合と同じとであります。此の社會は先程も申上げましたやうにばら〳〵の個人が形造つて居るものではないのであります。衆個人が同じ目的を以て同じ運命の下に或る時期の間共同生活をして居りますといふと、其處に彼等に共通な精神的貯蓄が自づと生じて來るのであります。これはばら〳〵になつてゐる個人の集りには見られない事實であります。この新に出來ました精神的貯蓄を以て其の各員が結び付けられて居りまする團體が卽ち社會であります。ですから社會は若し之を的確に申しますならば數多の精神の結合した結果、新らしい精神力が出來てそれで以て社會各員を結び付けて居る團體であります。此の新らしい精神力は個人の精神力の總和ではないのであります。この新しい精神力を捉へまするのにはこれを分量的に考へませぬで品質的に考へる必要があるのであります。例へば、百人の人が集つて一つの社會ができましたならば、其の精神的貯蓄は百人の人が集つて出來た精神的貯蓄の半分であるかといふに、そうではありませぬ。例へば僅に二人の人が集つても立派な精神的貯蓄が出來ることがございます。これに反して百人千人集つてもさほど立派な精神的貯蓄が出來ぬことがあります。例へばこのことを政黨に就いて申すならば、能く新聞が我國には我黨あるを知つて日本國あるを知らない政黨があるといふことを申しまするが、もし之が果して事實でありますならば、か

やうな政黨は決して社會を成して居らぬのであります。我黨あるを知つて日本國あるを知らないといふ政黨ならば、それは烏合の衆であつて政黨といふ團體的社會ではないのであります。國家あつての政黨であつて、政黨あつての國家ではないのですから、政黨は國家中心の精神的貯蓄によつてその全黨員が結び付けられなければならぬのであります。それでありますから、社會各員の產み出しました新たなる精神的貯蓄はこれを分量的に見ないで、品質的に見るべきものであります。

さて、國家的社會でありますが、この社會の有つて居りまする可能性は決して一樣でありませぬ。例へば國民が眠つてゐるか死んでゐるか、どうもハッキリと分らぬやうな國家の可能性といふものは極く力の弱いものであります。ところが他の國家にはその可能性のなか〳〵豐かなものがあります。差當り日本などはこの方の國家であると思ふのであります。今極く大雜把に此の点を說いて見ますといふと、日本では初めに支那の文化を取入れまして、孝德天皇の朝に一新したので御座います。無論是は外來の文化の刺激に基いたに相違ないのでありますが、併し外來文化ばかりではあれ程の國家的革新は出來なかつたのであります。こちらにも或る力强きものがありまして其處に外來文化が好き刺激を與へましたから大化の革新が出來たのであります。下つて明治維新にしましても同じことであります。矢張外來文化は隨分力强きものであつたのでありますが、それだけであれ程の大革新は行はれるものではない。我れ

に一種侮るまじき力があつてそれに外來文化が強い刺激を與へましたから明治維新が出來たのであります。ですから日本といふ國家は可能性のいかにも豐富な國であると思ふのであります。斯樣に國家的社會には種々の差別が御座いますが、これを組立てゝゐる各員が人格的に目覺めて反省的態度の下に自我創作をなしますといふと、それがやがて社會創作となるのであります。この際、自我創作と社會創作とは事實に於て同一であります。午前、自我創作をなしまして、午後、社會創作をする、といふものではない、午前でも午後でも時の如何はこれを問はぬのであります。人格的に覺醒したものが反省しまして、社會生活をしますといふと、それが一方からは自我創作であつて、他方からは社會創作となるのであります。此の意味で自我創作即社會創作であるのであります。さて是は事實なのでありますが、若し人にこの考へが無ければ此の考へを起させる必要があります。そうするとそれは理想であります。自我創作即國家創作は事實であつて又理想であります。

此の自我創作といふことは全く新しい自我を創作するかといひますと、そうでないのであります。一寸考へますといふとこれは全く新しい自我を創作するとのやうに取れますが、さうではないのであります。先程申し上げましたやうに吾々の人格は自我を創作いたしまして、其處に時の區劃を立てゝ進むのである。今日、創作された自我を昨日創作された自我に比べれば、前者にはプラス、エッキスで新しい

ものが加はるのでありますから、人格は常に新しい自我を作るのであります、けれども、今日の自我は昨日の自我に幾分か新しいものを加へて居るだけでありまして、全然新らしいものではありませぬ。試みに昨日の自我を過去の自我、眼前の自我を現在の自我、明日の自我を未來の自我と名付けますと、吾々の人格は時の流れの上に過去、現在、未來といふ區劃を立てまして自我創作を續けて參るのであります。此の点から申しますと、人格生活は歴史生活であります。何故ぞといふと、今日の我と昨日の我とは違ひ、明日の我と今日の我とは違つて、其處に過去、現在、未來といふ時の區劃が看取せられるからであります。ですから創作せられた自我は全然新しいのではなく、何處かにか過去の自我と共通のものがあるのであります。私は此の共通のものを生の根軸といふ言葉で言現はさうと思ひます。此の生の根軸は終始一貫して變らないものである、この根軸を廻りまして人格が毎日々々新生を打開して行くのであります。生の根軸といふ言葉は或は据りの惡い言葉か知れませぬが、心理學の方では之を人格の一貫性と申して居ります。例へば、私が唯今昨日のことを考へますといふとそれを記憶から喚起すことが出來るのでありますから、昨日の我と今日の我とには一貫した所があるに相違ありませぬ。このやうに考へますといふと吾々が今日の人格生活を支配するのに其の指導原理のあるものは之を過去に仰ぐといふことが必要であることが分るのであります。これが人格生活卽ち歴史生活の上で大事な所と思ひます。

何故かならば、現在は過去の延長であるからであります。若し吾々の今日の生活と昨日のそれと全く變つて來ればそれは寧ろ危險であると思ひます。何故、「或るもの」と限定するぞといひますと、過去は過去、現在は現在でありますから現在を支配する指導原理を專ら過去からのみ持ち來ることは出來ない筈であります。現在には上下と左右とありますから現在の指導原理の或る他のものは、これを左右からも取らなければならぬのであります。卽ち我々は過去を顧みまして其處から或る指導原理を仰ぎ、更に又左右を顧みまして、其處からも或る他の指導原理を取らなければ完全な人格生活をなすことが出來ぬのであります。これを現社會の同胞の生活狀態に關係付けて見ますといふと、今日、一部の同胞の中には在來の國民道德といふやうなものは聞くさへ困るといふやうな顏をするものがあります。私は斯樣な人は日本人として十分に繼續的な人格生活をすることは出來ぬやうに考へます。例へば、忠孝の內容は固よりこれを時代に副ふやうに改める必要は御座いませうが、兎に角、日本の國民道德の眼目としてこれを實行せねばならぬのであります。これが取りも直さず、過去から現實の指導原理の或るものを仰ぐ所以であります。彼の虎の門の不祥事件の責任者の如きは全く此點の思慮を欠いた者であります。北海道の或る高等學校の兩親と妹とを亡き者とした學生の如きも亦そうであります。この恐る可き二個の事實は過去から現在の指導原理を仰がぬ生活は危險であることを明かに敎へるものであります。又所謂新

しい人、即ち新人といはるゝ人は左右ばかりを見てこゝに指導原理を求むるのであります。左に英國がある、右に米國がある、英國にはこんな新しい事がある、米國にはこんな新しい事があるといふ風に主として左右からのみ現實を支配する指導原理を仰がうと致します。彼等は全く過去を顧みる事を忘れて仕舞つた樣に思ひます。吾々は日本人として繼續的な人格生活をする爲めには、それが歴史生活である限り、在來の國民道德を捨てる譯に行かない、けれども又吾々は世界人類の一部としては現在の指導原理の或者はこれを今日の優秀な國民の生活に求めなければならぬのであります。惜氣もなく忠孝を捨ててしまひます同胞も、餘りに新を好みまして舊を厭ふ同胞も、何れも人格生活即ち歴史生活といふ見方から見まして吾々の同意を憚るもので御座います。吾々は常に上下と左右とを顧みて、そこから終始一貫の人格生活の指導原理を仰がねばならぬと思ひます。斯樣な次第でありますから吾々は人格を以て個人の本質或は本體と考へまして、諸々の社會の中に生きてこれが完成を圖る可きであります。諸々の社會と申しますのは、例へば家族が一つの社會である、團體が一つの社會である、それから國家も一つの社會、更に廣く世界が一つの社會であります。吾々はこれ等の諸社會の中に生きまして、自我創作即ち社會創作の生活をなすべきであります。之をなすには常に自覺と反省といふ二つの態度を忘れてはならぬ。この二つの態度が自我創作と社會創作とを相即的に結び付けるものであります。吾々は諸々の社會

から知識、道德、信念といふやうな人格内容の資料を取入れまして己れの自我創作をして値打あるものとすべきである、それが聽て社會創作をして値打あるものとなす所以であります。これ等社會は先程申しましたやうに新しい精神力で結び付けられた人格者の結合でございますから、社會の中では與へるといふことが取ることになり、取るといふことが奪はれるといふことになるのであります。これが社會生活の一つの特色であります。利己主義は此点の理解を欠いて居るのであります。利己主義は絶へず取るばかりであります。ですから奪はれるのであります。かやうに社會の中では與へることが取ることになり、取ることが奪はれることになるまでに、儼然たる力が働くのでありますから、自覺と反省とを忘れないで人格生活を社會内で營むといふ事が必要であります。他の言葉で申しますならば、己れ先づ強き部分となりまして、而して後己れの屬して居ります全體を強くする生き方が必要である、これが即ち自我創作即社會創作の生き方であります。

此の考へ方を冒頭に申上げました自己主張、人心弛緩、暴力跋扈、人心惡化といふ四つの社會相に當嵌めて見ますといふとこれ等の事實は何れも自我創作即社會創作といふことになつて居りませぬ。私は今日に處するの道は自我創作即社會創作の生き方であると思ふのであります。若し知識階級の人人が此の道に徹底しまして、自からこの道に從つて生き、人々も亦これを敎へましたならば、或は現代日本

を救ふに幾分の効果がありはせぬかと思ふのであります。今日、我が社會の或る方面の人々は、人格觀念に徹底してをらず、精神生活の意味にも徹底して居りませぬ。況して自我創作即社會創作の生き方に至つては無論徹底して居りませぬ。ですから総ての機會を利用致しまして此の生き方を同胞に知らしめたならば、或は彼等が今日に處して誤りなきを得るかと考へるのであります。今日はどうしても知識階級の人々が先づ目覺めまして、次に其の周圍の人々を目覺めさせねばなりませぬ。丁度釋尊が自覺覺他をなされたやうに、我が知識階級の人々が皆釋尊になる必要がありはしまいかと思ふのであります。大體是で申上げようと思ひました所は申上げ了りまして御座いますから、御批評なり、御訂正なりどうか御遠慮なく仰しやつて戴きたいと思ひます。

河水清

堀内文次郎

霞立つ いはれをめぐる河水の
そこにもすめる千代の友鶴

土佐國を巡講して詠める

千家鐵麿

千町田の實りの秋の朗らかさげにや千秋の長五百の秋
行く手には筑紫の山々右手にはほのかにかすむ周防安藝の山
荒汐の汐の八汐の天つ日に輝きわたる佐田の岬かな
荒汐の汐の八汐の汐會ひに汐騷たけき佐田の岬かも
荒汐の汐の八汐を見下しつ靜かに立てる佐田岬の燈臺
佐田の岬やゝに波立ち搖れければ靜かになりし船の中かな
渡し船四万十川を朝立ちにわたる面に冷き秋風